N
S
毒地（地図上の同色全て）
ダカ
Central
大裂崖・一帯
オルムドレギ山
East
ルシナガの滝
South
ヴィンヘルム
ラツィールの滝
キルケス
ファヴル国立自然公園
セクレト
Jind

ファヴル大陸周辺地図

2

「な、なぁガンb」

「こんちわ～。おじさんたち、あの建物って何か分かる？」

唐突に聞き慣れない声が通路側から聞こえて来る。驚いて振り返ると、そこには見知らぬ若い男が笑顔を浮かべて立っていた。

謎の若い男はジグたちを乗り越え、通路から身を乗り出して窓の外を指差す。

「え？あ、あのどちら様」

突然会話に割り込んできた若い男に戸惑うジグを尻目に、ガンブは特に警戒する様子も無く若い男の視線の先を見つめる。

「ん、え～となにに。あれって……何か向こうで濃い色してる所か？……さぁな。分かんねぇなぁ」

指差したのは、バスの進行方向の右側に見える、濃い緑色をした大地であった。大地と言うにはかなり黒ずんだ色をしており、その表面が風に煽られ微かに波打っているのが見える。

至る所から気泡が表面に浮かび上がっており、それが破裂すると白い湯気のような蒸気が沸き立って、そのまま拡散して消えていく。

毒々しい事を除けば、確かにガンブが言う通り、若干広い普通の沼に見える。中から生え出している小さな花も見えるが、興味を持ったガンブに向かって頷きながら謎の男が続ける。

「あれは言ってしまえば沼だよ。けど、ただの沼じゃない。今でも有毒なガスを吐き続けている毒の沼……この辺りの人たちは皆『毒地』って呼んでる」

『『ドクチ』……。沼じゃねぇのか」

「確かに実質的には沼に近いんだけど、毒地って言う人の方が多いと思う。沼って言っても粘り気は余り無いし、毒素もそんなに強くないし」

謎の男はオールバックに流した茶色い前髪を軽く弄りながら、掛けているサングラスを額に上げる。

今どきの若者らしい風体で、着ている物も華美では無いが質の高いブランド製で、苦も無く着こなせている。その軽い振る舞いも相まって、若々しくスタイリッシュな印象を与える。

「今咲いてる紫色の花あるでしょ？元々毒に耐性を持っている品種だから、園芸とか漢方に栽培されてて立派な農業資源ですよ。それに、ポコポコ吐き出されるガスは今じゃ立派な動力源だから世の中分からないよねー」

そう言って謎の男は別の建物に指を向ける。バスの進行方向の先に立っている大きな工場のような建造物が、バスが走る道路に沿って長々と続いている。

長い煙突が等間隔に工場の屋根から突き出て白い煙を吐き出している。煙突はその存在感を消し去る様に晴れた空と同じ淡い青色に塗装されている。

表面の壁には工場のフォルムとは似合わない、爽やかな青色と白で青空が描写されている。その下には子供が描いた様な沢山の人間や動物の絵が並んでおり、やけにほのぼのとした雰囲気を醸し出している。

「この周辺の毒地から噴き出る毒ガスを動力にしてる発電所だよ。ここで作られた電力は南ファヴルの西側一帯の電力を賄えるんだって」

『ハツデン……ショ』？ハッテン所ではｎイデッ！」

『電』力を『発』生させる場『所』だ。いかがわしい雄共はいない」

ガンブの真面目なボケを拳骨と共にきっぱりと吐き捨てる。そのツッコミは謎の男を遮る程に速かった。

「いって……え、えと、『デンリョク』っつうのは……確か、雷みたいなもんだっけか」

「そう。お前が家で（滅茶苦茶に）使ってたテレビや掃除機、芝刈り機や電子レンジも全部電力で動くんだ。電力は今の時代の動力の殆どを担う最重要エネルギーだからな。他の国じゃ原子力とか火力とかに頼ってるが、ファヴルはこの毒地のお陰で自然からエネルギーを捻出できてるんだ。もう何千年もな」

「何千年ねぇ……。どうなんだか」

「まぁ、何千年っていうのも地質学者が出した曖昧な年

代らしいし、多少前後したんだろ。気にすんな」
会話が弾んでいく中であっさり打ち解けていたが、流石にジグが違和感に気付く。
「……って、あ、あの。有難いのですが……ど、どなたでしょうか？」
流石に謎の男も失礼に思ったのか、慌てた様子で軽く会釈をする。
「あっ、いきなりスイマセン。なんかおじさんたちこの辺り初めてそうだったんで、つい口がムズムズして……。あ、オレの名前ヴァザックって言います。一応地理には詳しいんで」
若干警戒しながらも、その気さくそうな雰囲気にジグの緊張が若干解ける。だが、決して視線を外そうとはしない。
「そ、そうなんですか。……あ、えー、えーと……私はジグと言います。今は……ちょっと家族旅行中で、これからヴィンヘルムに向かう予定なんです」
そう言って傍らで眠るリフィーに視線を向ける。ヴァザックも意味を察したようで口の前に一本指を立てて静かにしてくれる。
「……うーむ……。まっ、ちーっす、俺はガンブって言うんだ。宜しくな兄ちゃん」
ガンブも多少驚きながらも自己紹介をする。ヴァザックはガンブに向いてもう一度会釈をして続ける。
「へー家族旅行！羨ましいなぁ。オレは所謂バックパッカーってヤツで、三日前にファヴルに戻って来たんですよ。それで空港のホテルで休んでたらあの事故でしょ？封鎖されたらヤバいと思って急遽バスで脱出したんですよー」
「ほう、結構若いみたいなのに海外を単独で旅行か。随分行動力あるんだね。年齢は？」
「あ、オレ今は……えっと……に、二四歳っす！！チャラく見えても一応成人してます！まぁ、旅先で色々ゴタゴタしちゃいますけどね」
誇らしくも恥ずかしそうに頭を掻くヴァザックだが、若干小柄で童顔っぽく見えるので、まだ十代でも十分通

用しそうな若々しさである。
「お、結構鍛えてるからもっと若いと思ったが……。いや、鍛えてるから成人して見えるのかな？なぁ、ガンブ……」
「……うんっ？……お、おぅそうだな！！やっぱり昼飯は肉に限るよな！！」
何か考え込んでいたのか、他人の前で話を全く聞いていなかったガンブにジグが冷たい視線を向ける。
「な、何だよその目は！俺だって無意味にボケーっとしてねぇよ！だってよコイツ……」
「初対面の方に『コイツ』は失礼だろうが、変態」
「変態じゃねぇ！変態と言う名の淫乱と呼べ！」
「自分で悪化させてどうする！あ、後今更ですが、コイツはちょっと頭がファンタジーなので一々変な事言っても気にしないで下さい。」
「あ、今馬鹿にしたな？！うっせぇよ！だからコイツから……」
「ヴァザックさんだ！あのなぁ、いい加減勢いで呼ぶのは止めろ！！」
「あ、あのーオレは別にそう言うの気にしないんで、そこまで怒らなくても……」
口喧嘩に挟まれたヴァザックが場を収拾しようとすると、道路は徐々に坂を上り始め、それまで真横に見えていた毒地や発電所が眼下に取り残されてしまう。
気付くと車窓の下端に高速で通り過ぎるガードレールが入り込む。それまでの畦道のような道路から、コンクリートで舗装された橋上の高速道路に進んだらしい。
ここまで来ると自動車の往来も多くなり、追い越し運転をしてくる自動車が反対側の車窓から見える。反対車線にも高速で走る自動車が通り過ぎ、都市圏の高速道路と何ら遜色がない込み具合になる。
「お、おぉぉおおおおおおぉっ！？は、橋渡ったら、け、結構揺れ出したぞ。ってか、随分『ジドウシャ』ってのが増えたな」
「高速は速度を上げないといけないから結構揺れるぞ。危険だから立つんじゃないぞ。それに、この辺りには大

きめの都市が密集してくるしな。俺たちもヴィンヘルム辺りで次の移動手段を探すぞ。あそこは南ファヴル最大の都市だからな」
「へ、へぇ。結構行き擦りの旅行なんですか？それともあの事故で予定が狂っちゃったからとか？」
あれだけ口喧嘩の応酬に晒されながらも未だに席に戻る気配が無いヴァザック。彼からの鋭いツッコミに、思わずジグの口が止まる。
「え……そ、そうなんだよ！本当はダカまで向かう予定だったんだけど、暫く行けそうにないから代わりにヴィンヘルムで時間を潰そうかと……」
「そりゃあ良いですよ！今なら丁度国立自然公園の植物も見頃でしょうし、何より世界でも数少ない『輝煌樹』が……」
「お、ジグ、リフィーちゃん起きたみてぇだぞ」
ガンブの言う通り、窓際で毛布に包まっていた小さな体が背伸びを始めた。大きな欠伸をして目を覚ますと、その大きな丸い瞳で周囲を見回している。
そして、見慣れた二人の男と見慣れぬ一人の男が視界に入ると、嬉しそうに微笑んで体を弾ませた。
「おっと、起こしちゃったかな。……じゃあオレはここで。オレもヴィンヘルムで降りるんで、どこかでお会いできるかもですね」
「あぁそうだね。短い間だったがありがとう。それじゃあ気を付けてね」
自分の席に戻ったヴァザックを見送ると、代わりにリフィーがジグの視界に入った。
「うぅー……ん。パパおはよう。ガンブおじさんもおはよう。ねーあのひとだぁれ？」
「お早うリフィー。良く寝れたか。あの人は同じバスに乗ってたお兄さんだよ。この辺りの事を色々パパに教えてくれたんだ」
「おはような、リフィーちゃん。今は『コウソクドーロ』の上走ってるらしいぜ」
「うん、ぐっすり寝れたよ。えー？もうこうそくどうろなの？アレ、見えるかなぁ」

羽織った毛布で体を包みながら、窓の外に向けて体を向ける。何かを探すように外を見渡すリフィーに釣られ、ジグとガンブも窓の外を見つめる。

そして、リフィーが座席の上で膝立ちになった瞬間、嬉しそうに大声を上げた。

「あ、あった！あったよパパ。リフィー知ってる！あれが『だいれつがい』でしょ？飛行機の中で教えてもらったよ」

ジグもその言葉に中腰になって窓の外を見つめる。ガンブに至っては、他に誰も乗客がいない事を良い事に、後ろの席に移動して窓にへばり付いている。ヴァザックも当たり前の様に隣の窓から外を見る。

それまで毒地しか見えなかった大地の向こうに、大きな裂け目が広がっていた。周囲に殆ど緑の大地は確認できず、代わりに禿げた鈍色の大地が崖に沿って続いている。進行方向に沿うように左右に崖は走り、遥か彼方にあるであろう対岸は雲に霞んで見えない。

浮かんでいる雲も、谷底から噴き上げている強風に形を変えて霧散しては高速で崖の外に飛ばされる。高速道路からはまだまだかなりの距離が有る筈だが、その圧倒的な存在感に目を逸らすことも出来ない。

手前の発電所や住宅地と、奥の荒涼とした大地と切り立った巨大な崖のコントラストは奇妙な程に美しく、別世界との境界線を走っている気持ちになる。

「あぁ、そうだ。良く覚えてたな、偉いぞ。昨日飛行機からも見えてたかもな。あれがファヴル国で最も有名な自然遺産、『大裂崖』だ」

「うん！だってあれはどらごんのつめあとなんでしょ。すごくおっきくてカッコイイ！」

リフィーの自慢話を聞いてか、ガンブはガラスに押し付けていた顔を座席の上から出して興味深そうに見下ろす。

「ドラゴンの爪痕ぉ？あんなデカいのが」

「うん、そうだよ！パパがね、えほんの中にも描いてたもん。『大きなかけは、怒ったどらごんがつくったつめあと』だって。ねーパパ！」

「んっ？そうだな。まぁ一般的には『大裂壊』っつう大災害で出来たって言われてるけどな。やっぱり何千年前にらしいが」
『ダイレッガイ』は『ダイレッカイ』という災害で生まれた、ねぇ。……まぁ、割と最近起こった事かもしれねぇけどな」
『最近』と言っても、ガンブにとっては千年単位で『最近』扱いだから注意が必要である。
何とか社会に溶け込ませようと努力はしているが、不意に出る地の発言まではジグでも対処できない。
そんな突拍子もないガンブの返事に、リフィーは目をキラキラさせて飛びついた。座席の上に立ちあがって背伸びをし、厳ついガンブの顔を嬉しそうに凝視する。
小説家の父親に似たのか、そのような歴史の知識に強い興味があるようだ。
『最近』!?じゃあやっぱり、さいきんにもどらごんがいるよねいるよね!?リフィー、どらごんにあいたい!!きのうのどらごんはよく見えなかったけど、こんどはちゃんとお話ししてみたい!!」
ガンブも釣られてリフィーに顔を近づける。ニヤニヤと笑顔を浮かべているのに嫌な予感はするが、嬉しそうに瞳を見つめる。
服の上からでも分かる程鍛え上げられた肉体と無邪気な言動、サッパリと刈り上げられた黒髪から見るととても若々しく見える。実際、頭髪や眉毛、顎に生える無精髭以外の体毛は手入れしたように殆ど生えていない。
だが、灰色の瞳の奥に力強さと時折見せる自信に満ちた態度には四十手前のジグ以上の年季を感じさせる。
ドラゴンスレイヤーとして活動し続けていた経験故か、余裕ある言動に安心すると同時に何か意味があるのかと疑ってしまう事もある。
「竜とお話しか！リフィーちゃんはどこぞのおっさんと違って柔軟性があるんだなー。おじさんは嬉しいぞ！」
「悪かったな石頭で。これでも色々考えを纏めようとしてるんだがな」
大きな掌でリフィーの頭を優しく撫でる。リフィーも

褒められた事が嬉しいのか、更に満面の笑顔を浮かべて体を弾ませる。
だが、一転ガンブの口調が静けさを纏う。灰色の瞳にはまた憂いを浮かべ、諭すように静かに言葉を紡ぐ。
「……けどな、リフィーちゃん。竜は人間とは違うんだ。仲良くなろうと思っても簡単には出来ないんだよな」
「そうなの？なんで？」
「考え方も違うし、体の大きさも食べる物も住める場所も……ぜーんぶ違う。仲良くなるのは難しいし、皆が皆そう言う考えを持てるわけじゃないぞ」
「みんななかよくできないの？」
「出来ない訳じゃ無いが難しいだろうな。それこそ、色んな物を捨てて行かないとスタート地点に立つのも出来ないかもな」
「ふーん……みんなでなかよくできればいいのに」
「確かにな。ま、それができれば皆苦労はしないんだろうし、俺みたいな奴もいないんだろうけどな」
ガンブには似合わない至極真っ当で適切な説明に、思わずジグも聞き入ってしまった。リフィーも視線を逸らさす真面目な表情をしている。
何だかんだ、数多の生き物の生死を見続けたのだろう。言葉自体は軽い物を選んではいるが、その端端にガンブ自身の重い経験の痕跡が滲み出ている。
以前取材した、戦地の最前線に出向いていた元兵士の体験談を聞いた時のように感じる。話す際の雰囲気と表情、口調を組み合わせた効果で、聞く者の意識を絡め取る引力を放っていた。
「……変わったお方ですね」
「え、ま、あ、はははは……さ、さっきも言いましたが、割と変な奴なんで発言は気にしないで下さい。自分の世界にのめり込みやすい性格なんで……」
気にするなと言ってもヴァザックにとっては気になるのか、座席の上に肘を着いてガンブとリフィーの会話に耳を傾けている。
「ドラゴンと人が仲良く、ねぇ……正に夢幻の境地と言うか、何というか……」

表情は柔和なままだが、どこか現実的で冷めた口調で呟く。とは言え今の時代、ガンブの考えを持つ方がかなりおかしいのは動かしがたい事実なのだが。
「リフィーたちもどらごんもおんなじ生き物なのに。ねぇ、おじさん。どうすればみんななかよくできるとおもう？」
二人の会話から色々と不必要に深く考えを巡らせてしまい、実体験も無しに感傷に浸っていたが、リフィーの何気ない一言で正気に戻ったジグ。
言い換えれば、ガンブに関して猛烈に嫌な予感が脳内を駆け巡った。
「ん？そりゃー簡単だよ。人間だって竜だって気持ち良い事が好きなんだ。だからさ、種族とか性別とかの壁を越えt」
「おっとそんな所にデカい蚊が！！」
明らかな棒読みでガンブの頬を強烈に叩くジグ。振りかぶるのではなくストレートに腕を突き出して一気に吹き飛ばす。
存在したかも確かでは無い蚊の感触は一切感じられず、代わりに耳通りの良い乾いた音と共に掌全体がじんわり痛んだ。
「ふごぶっ！？」
勢い良く吹っ飛んだガンブは鈍い音と共に窓に側頭部を思い切りぶつけると、反動で座席の上に横たわる様に倒れ込んだ。不意の衝撃に暫く頬を抑え、痛みに耐える様に全身を震わせている。
「いやぁあんなデカい蚊なのに随分と逃げ足が速いなぁ。リフィー、お前も注意するんだぞ。毒地の周辺にはウイルスを持った蚊が多いって言うしな。ねぇヴァザックさん？」
いきなり会話を振られて慌てるが、ジグの脅迫にも似た押し付けがましい笑顔と視線からヴァザックも空気を呼んで同意する。
「……は、ハイソウデス！だ、だから注意しておくべきですよ。り、リフィーチャン？は、ははは……」
「うん、分かったー。ガンブおじさーん、もう蚊はパパ

がおいはらってくれたから、かおだしてもだいじょうぶだよ」
ジグの真意とガンブの発言を全く気にせず、いつも通りの明るい口調でリフィーが座席越しに声を掛ける。ガンブはなんとか片手を上げて『大丈夫』のサインを出しているようだが、体を起こす様子は見られない。
どうやら蚊に驚いて隠れたと思っているようだが、その無邪気さが我が娘ながらちょっと恐ろしく感じる。
リフィーが何度か声を掛けている間もガンブは動作だけで意思表示をしていたが、窓の外が本格的に都心部に突入する頃になると漸く重そうに上半身を上げた。
掌の形に赤く腫れた頬を労わる様に撫でながら、ぎこちない口調でリフィーを安堵させる。だが、涙の浮かんだ目でチラリとジグを睨み付ける。
当のジグ本人はリフィーに声を掛けながら不自然に笑顔を浮かべており、ガンブからの視線を全く気にせず堂々と振る舞っている。
それどころか、空気を読まない下ネタを言おうとしていたガンブに対して尋常では無い怒りのオーラを醸し出している。流石のガンブでも冷や汗を流してしまう程にオーラは強く、思わず誤ってしまう。
「あ、あーごめん、ごめんよジグゥ！ちょっとしたお遊びだったんだから、許してくれよぉ。ね？ねね？」
「そうだな。お遊びであんな事言っちまうような奴には、昼飯抜きでもしょうがないよな。俺たちが食べてる間、ずっと水でも飲んでてくれよ！」
「え。そ、それはちょっと俺の腹の虫がメソメソ泣いて困ってしまうんですが……」
戸惑うガンブを尻目にジグがドンドン話を進める。リフィーに昼食のチョイスを訊いては話を盛り上げ、目的地であるウィンヘルムのレストランをタブレットで検索し始める。
軽く検索を掛けたつもりだったが、次から次へとサイトがヒットする。店のホームページから個人の感想まで、逆に情報が多すぎても困ってしまう。
「流石は観光都市だな。リーズナブルから高級感まで色

んな店がある、ある、ある。素通りする予定だからホテル系のは避けたいんだが……」
「え、次の街で休まねぇのか？予定決めるとか言ってたじゃんか」
早速復活して会話に割り込むガンブだが、頬にはジグの大きな張り手の痕がくっきりと残っている。真っ赤に腫れて、中々痛そうだ。
「飛行機を襲ってきた奴らがいるだろ。出来るだけ早く南ファヴルから離れた方が良いと思う。中央ファヴルでも、『ルシナガの滝』の近くなら観光施設も幾つかあるから、そこまでは素通りで行こうと考えてる」
「どのくらい時間かかるんだ？」
「……多分だが、乗り物に乗って一週間前後」
「長っ！？」
ガンブの驚く声がももっともだが、今は時間が惜しい。たった一人の愛娘に得体の知れない呪いが掛かっているのだ。本当は飛行機でもっと急ぎたかった。
だが、それ手段が絶たれてしまった以上、この道を行くしかない。
何時の間にか世界地図を開いていたガンブが、更に突っ込んで反論する。
「……ってーかさぁ、何で西側から回り込むんだ？ここ、南ファヴルの東端……え、えーと……」
「『ラツィールの滝』だな」
「そ！そっちにも橋があるんだろ？だったらそっち渡って、直接東ファヴルに乗り込めば良いんじゃねぇのか」
普通なら、その言い分も最もである。ガンブには珍しい、的を射た発言である。
「地図だけを見ればな。けど、その辺りには中継地点になる様な町や施設が殆どない。流石のその距離を補給なしで走破するのは難しいぞ。そもそも、バスとかの交通網も整備されてない筈だ」
「マジか。随分と錆びれてんだな南の東は。毒地があってデンリョク補給しまくれそうなのによ」
「いや、その辺りじゃその毒地が問題なんだ」
「？なんだそれ」

リフィーに店を探すようにタブレットを渡すと、ガンブが見ている地図を覗き込みながら、その理由を指差し説明をする。

まず指を差したのは、北と東西の三方向に分かれた『大裂崖』、その中央部に島の様に残っている小さな台地で、『オルムドレキ山』と記載されている。

「この『オルムドレキ山』周辺の毒地だけは、毒素が異常に強いんだ。丁度『大裂崖』挟んで南側に毒地があるだろ。その付近は場合によっては通行禁止になる事もある。だから、その脇を通る道路は基本一般車両は通過できない。確か、『ラツィールの滝』の監視や橋の修繕、あとはそこで稼働している大型の発電所を所轄する機関しか使えない筈だ」

「あ、因みにこの周辺は毒地だけでなく空気も汚染されていて、大裂崖から吹き上がる上昇気流で周囲にいると呼吸器系の病気になりやすいですよ」

ヴァザックが横から割り込んで補足を入れる。初対面の時と良い、気になる話題があるとそれに関して説明したがる性分なのだろうか。

「……ピンポイントだな。その、オルムドレキから毒がブワー漏れてんのか？その割には随分と原型留めてんだな」

「漏れてるというか溢れてるというか、まぁここにこそファヴルの有名な竜の伝説があるんだが……」

ジグが更に続けて説明しようとした瞬間、バスの中に気の抜けた電子音が天井のスピーカーから鳴り響く。続けて、録音された女性の良く通る声が聞こえて来た。

『こんにちは。乗客の皆様、この度は我がバス会社をご利用して頂き、誠にありがとうございます。当車両は間も無く『ヴィンヘルム市』に入ります。終点『ヴィンヘルム中央駅前』までは、今暫くお待ち下さい。到着予定時刻は……』

「ぱぱー、おじさーん、しゅうてんだって！ほら、おっきなたてものがいっぱい見えるよ!!リフィーね、このお店でごはん食べたい!!みてみてみてー」

自分で見つけたレストランの画面を写し出したタブレ

ットをジグに見せつけて、リフィーは嬉しそうに声を弾ませる。
画面には広い大通りに面したカフェのようなレストランの写真が写っている。カラフルなパラソルが立てられたテーブルが数多く置かれており、一見して若い男女がデートをするお洒落な店のようだ。
「あのね、ここのデザートがすごくおいしそうで、すごくかわいいんだって！ここでごはんたべたい！」
「おーそうか。……うん、ふむふむ……値段もそう高くはないし、開店時間も問題ないな。場所は……うん、丁度終点の近くだな。よし、ここにするか。ガンブも良いよな」
「うん、オッケー。俺は食えれば何でも良いぞ。こんなデカい街の店だ、結構良い味してるだろうし、沢山食えそうだ」
何時の間にか高速を降りたバスは、既に市街地の大通りを走っていた。行き交う車も多く、車道もキチンと舗装され揺れは少ない。
「……というか、ヴァザックさん、何でいきなりこっちの席に来たんですか？」
「いや、ここから進むルートであの席だと見えにくいんですよね。大裂崖もそうですけど、崖下の景色も」
「……あぁ！成程」
正に大都会と言っていい規模だ。歩道には老若男女多くの人々が歩いており、各々の生活を過ごしている。様々なオフィスビルやファッションビルの中に入って行く人や出て行く人、常に群衆の流れは変化し続けている。
頭を下げつつ角度を変えて見上げれば、ビルの壁面に埋め込まれた薄型ディスプレイが、広告やニュース映像を写し出しており、人々の喧騒にも負けない音量でBGMの役割を担っている。
少なくとも、ジグやリフィーの故郷であるセクレトの片田舎とは大きく異なる賑やかさである。正に誰もが想像するような大都会で、通り過ぎていくビルの谷間からは狭い青空が見えた。

「ああ、だが、観光都市ヴィンヘルムの本領はこれだけじゃない」
「そうっすね。ほら、前の方を見て下さい。あの橋を越えた先が終点なんですけど……」
ジグとヴァザックに促されるようにリフィーとガンブは進行方向に視線を向ける。
ビル群の間を這うように流れている巨大な川と、その上に掛けられた片側二車線の大きな鉄橋。川の両岸には堤防を兼ねた遊歩道と広場が整備され、人々が思い思いの時間を過ごしている。
太陽が高く昇っているためか、川の水が一際煌めいて見える。船が波を立てれば煌めきは揺らめき、目に見えない水の動きに合わさる。
「随分とデカい川だな」
「元々あった川を人工的に広げたらしいな。治水と自然保護の為だとかで、このまま先の湖に注がれてる」
ジグが窓の外を指差す。確かに遠くに見える川下には、一際青く煌めいている場所が確認できる。
「んで、そこから更にダムを経由して崖下の自然公園に新鮮な水が注がれる。つまり、自然公園専用の湖と言っても過言じゃないな」
「え、街中の湖って、しかもダムとかあるもんなのか？随分贅沢な自然公園だな。……ガバガバなのか？」
「それ以上言うと川に叩き落とすぞ」
車両と共に流されるがまま鉄橋を渡り終える。ジグの言う通り、高い崖の上に飛び出した。垂直に抉れた大地の端には湖から落ちる大きな滝が見え、大都会の喧騒は一気に様相を変える。
「うわー……キラキラしてるー。ねーぱぱ、あそこがキラキラで、すごくきれい！」
「うをっ!?な、なんじゃありゃ。森……じゃねぇし……またガラス張りか？」
高層ビル群は消失し、代わりに広範囲に広がる森が眼下に入った。バスは橋を渡ると崖に沿ってすぐ左折をし、川側の車線を疾走する。
森はすぐ近くに見える大裂崖の際まで広がっている

ようで、一部突き出た様に残っている地面の形に添って木々が生い茂っている。木々の高さや種類は一見バラバラで、古くからの植生に頼った自然林のようだ。

だが、それ以上に三人の目を引くのは大きな半透明なドームだった。森の中心部を全て覆い隠すように立てられており、その両脇からは大陸側と大裂崖側を区切るように巨大な壁が立てられている。

ドームにも強い日光が差しているが、リフィーの言った『キラキラ』はその中にある。

バスが走って見る角度が変わる度、ドームの中から反射する光が何重にも煌めいて見える。色彩や煌めきを瞬間瞬間に変化させてリフィーたちの瞳を輝かせる。

巨大な宝石箱。誰もがそう思うだろう。

「あれがファヴルの自然遺産として有名な『ファヴル国立自然公園』、通称『宝石の森』だ。……ま、今回は時間が無いからスルーだろうけどな」

そう当然の様に言うジグも、どこか嬉しそうにドームの中の煌めきを目で追っていた。

「『宝石の森』……なぁ。俺から言えば、宝石を好き勝手に独占してるようにしか見えねぇけど」

「ま、ファヴルという国単位で独占しているのは間違いないだろうな。……中々シビアな事言うな。何か謂れとかあるのか？」

「……べっつにー。宝石なんかに興味ねぇし」

ジグが視線をバスの中に戻すと、ヴァザックも席から立ち上がってドームを見ていた。そして視線に気づくと、笑顔を浮かべて親指を上げた。

恐らくは、ジグの説明が全て間違ってなかった事に対する激励の意味だろう。

だが、ジグは気付いていた。その緑色の瞳だけは笑っていないことに。まるで獲物を狙う野獣のような鋭い瞳で崖下を観察していたことに。

先程とのギャップに思わず背筋が震えてしまい、礼を言おうにも唇が固まってしまい声が出なかった。そのまま逃げるように視線を崖下に戻す。

ドームを見せるように崖の上を走っていたバスだが、

再度左折をして橋を渡り始めるとすぐに視界から消えてしまう。

『こんにちは。乗客の皆様、この度は我がバス会社をご利用しての長旅お疲れ様でした。当車両は間も無く、終点『ヴィンヘルム中央駅』に到着致します。ご乗車のお客様は忘れずに下車の準備をお願い致します。また、走行中の座席からの移動は大変危険です。必ず、バスが完全に停車してから降車口に向かわれますよう、お願い致します。到着予定時刻は……』

アナウンスが響くと、ヴァザックは通路に戻り自分の席へと踵を返す。

「じゃあオレは先に失礼します。予約してる宿のチャックイン時間が迫ってるんで。何かの縁があったらまた会いましょうね！」

挨拶代わりに手を振ると、リフィーもそれに合わせてブンブンと大きな動きで振り返した。

そう人懐っこく言った男の瞳から、既に先程の鋭さは失われていた。